

## 校内相談室への来談に関する一考察

— 中高生の相談室イメージと依存性・精神的健康との関連について —

刀 祢 眞紀子

### I. 問題と目的

スクールカウンセラー制度などにより、校内に相談室のある中学校・高等学校が増加している。生徒は校内相談室をどのように受けとめているのだろうか。またどのような生徒が相談室を利用しているのだろうか。スクールカウンセリングに関する文献（近藤，1996；倉光，1996）では、友達と連れ立った気軽なものや休み時間に居座るもの、暗い表情で来談するが何も話さずその後一度も来談しないもの…などさまざまな形での来室が存在することが示唆され報告されている。これら校内相談室への来談および来談者についてこれまでの来談および来談動機に関する先行研究から検討することが本研究の目的である。

来談に関する先行研究の中で相談室イメージという因子が、学生相談の領域で研究され、対人関係・悩みや相談希望の有無との関連性、来談の準備因子として働くことが検証されてきている（例：相談室に肯定的イメージをもつ群は友人や相談相手をもち気軽に人付き合いしやすい。よりどころとしての来談など 森田，1990，1997）。本研究ではその対象が中高生であるため、その時期に影響の大きいと予想される周囲の対象（親，友達，恋人など）への依存性を対人関係の指標とし、また悩みの有無を問うことに加えて精神的健康度（ストレス症状の多さ）も尺度に加え、中高生の校内相談室への来談者や来談の特徴について検討した。

### II. 方法

1) 対象 東海3県の公立中学校2校・高等学校3校計580名（男302 女子278）

2) 調査期間 平成11年11月下旬～12月上旬

3) 質問紙構成 相談室やカウンセラーへのイメージを自由記述する項目（①相談室はどのようなところだと思いますか？（相談室イメージ）②相談員やカウンセラーはどのような人だと思いますか？（カウンセラーイメージ）③校の中に相談室があることについてどう思いますか？（校内相談室への態度）④相談室に期待することがあれば書いてください（要望）、個人背景要因（学年・性別・同居家族）、相談室関連要因（相談室の認知度、相談意志の有無、相談希望の有無、悩みの内容）、依存性尺度（母親，父親，友達などの各対象に対し評定して

もらうもの。高橋 1968）、精神的健康の測定尺度（GHQ-28）。

### III. 結果と考察

#### 1) イメージの分類

自由記述の各項目は主に森田（1990）の分類によりなされた。スクールカウンセリングに特有と考えられたものは別カテゴリーに分類した（＜リラックスの場＞など）。回答無しも1群として分類した。分類は筆者と臨床心理学を学ぶ大学院生1名により実施した。①＜依存・信頼＞（「アドバイスしてくれるところ」「信頼できる人」など困ったときにそこに行けば何とかしてくれるだろうという依存と自分のために活用しようという現実的な意味付けを表すもの）②＜親近感＞（「気軽に行けそう」「親しみやすい」など気軽に立ち寄ろうとする距離の近さを示すもの）③＜受容への期待＞（「温かい場所」など雰囲気や対応に関するもので受け入れられることへの期待を表すもの）④＜肯定的評価＞（「いい」など特に理由は述べられていないが肯定的な評価を表すもの）⑤＜両価的感情＞（「いいとは思いが入りにくい」「いきづらい」など近づこうとして近付けない両価的な気持ちを表すもの）⑥＜違和感＞（「暗いところ」など雰囲気の重さ、特殊性に対する違和感が表現されているもの）⑦＜非関与の態度＞（「自分には必要ない」など存在意義は認めながら自分との関連を否定したり距離をとっているもの）⑧＜不信・疑問＞（「信用できない」など相談室に依存することへの抵抗感や否定的な感情を示すもの）⑨＜イメージ無し＞（「よくわからない」などの中性的記述）。

以下の考察は分類されたイメージ群によって分散分析や $\chi^2$ 検定を施した結果、有意差のみられたところについてのものである。

#### 2) 相談室イメージと青年期の依存性との関連について

校内相談室に両価的感情をもつ群や依存・信頼群は、非関与の態度群、回答無し群、肯定的評価群など相談室に距離をおいた群と比較して依存要求が強い。近付こうとして近付けないイメージや困っているときに頼りになるというイメージは依存要求の強さからくと推測できる。また依存・信頼を要望する群、親しみやすさを要望する群とも依存要求が高く要望無し群は依存要求が低い。

対人的な要求が相談室への態度に現れることが伺える。

また学年によって有意差のみられた依存要求の強さ、依存の対象は発達の指標として考えられる可能性がある。依存要求は高1、中1と高く、高2が最も低い。依存の対象は中1では「母親」が多く「異性の友人」が対象となりにくい。高2で「母親」が対象となることは最も少なくなるが代わりに「同性の友人」が対象となりやすくなる。対象は男女差もみられ女子は「母親」男子は「異性の友人」が対象となりやすい。これらは高橋恵子(1970)や加藤(1987)の先行研究と同様の傾向であるが、高橋蔵人(1989)の研究における第2の分離個体化理論による青年期の変化の記述によっても説明されると考えられる。そして各イメージの学年差も対象関係の発達の特徴を現していると考えられる結果が出ている。カウンセラーイメージの〈親近感〉群は中3に多く高校生では少ない。校内相談室に肯定的イメージを持った生徒は中1、2に多く高校生で少ない。逆にカウンセラーイメージに〈回答無し〉〈肯定的イメージ〉群は中学生では少なく高校生に多い。カウンセラーや校内相談室の〈否定的イメージ〉群は高校3年生に多い。分離個体化の第1時期にある中学生が脱備給の前段階にあって「母親」的にカウンセラーや校内相談室を捉え、第2の時期にある高校生が両親とも仲間ともちがう存在、もしくは離れようとしている両親のイメージをカウンセラーや校内相談室に投影しているかもしれない。

### 3) 相談室イメージと精神的健康との関連について

GHQ得点は性別差がみられ、女子の方が男子よりも高い。また依存性尺度の中でGHQ得点と関連がみられたものがあった。一つが依存性得点であり、依存要求が強くなるほどストレス症状をもつことが多くなる。二つが焦点となる対象である。「異性の友人」を依存の対象とする生徒がもっともストレス症状を多くもち、次にストレス症状が多かった「同性の友人」とも有意差の出るほどである。「家族」を依存の対象とする生徒はストレス症状が少ない。「異性の友人」は青年期前中期にある生徒にとっては安定した対象ではなく「異性の友人」を対象とする高校生は依存と独立をめぐる親からの分離の過程で葛藤や不安の多い時期であるとも推察され、それらがストレス症状につながると考えうる。

そしてGHQ尺度はイメージ項目とも強い関連をもっている。相談室に両価的感情をもつ生徒、カウンセラーに不信・疑問をもつ生徒、校内相談室に両価的感情や非関与の態度をもつ生徒、相談室に依存・信頼の要望をもつ生徒は各項目における他群と比較してかなり多くのストレス症状をもっており、近付こうとして近付けない葛藤、人に対する不信・疑問、かかわりをとろうとしない

態度や依存できる対象を求めることなどがストレスと関連していることが示唆される。注目すべきは、これらストレス症状を多くもっている群が他群と比較して「悩みをもつ」比率が高いかという点すべてがそうではないことである。校内相談室に両価的感情をもつ生徒や依存・信頼を要望する生徒は依存欲求が強く相談意志も悩みももつ割合が高いが、「相談室」に両価的感情を持っていたりカウンセラーに不信・疑問のイメージをもっている生徒はそのストレス症状の多さにもかかわらず、相談意志も悩みも有意に比率が高いわけでは無い。校内相談室に近付こうとして近付けなかったり、依存・信頼を要望する生徒は、悩みをもちそれを誰かにまたは相談室に相談しようかと迷うことが伺える。実際これらの群は相談室の認知度も高い。

### 4) 相談室イメージと相談意志の有無・悩みの有無・相談室認知との関連について

相談室イメージと先行研究と同様、悩みの有無・相談希望の有無は強い関連をみせ、また相談室認知とも強い関連をみせた。相談室イメージの回答無し群、肯定的評価群は相談意志がないまたは悩みがない生徒が多く、相談室認知度が低い傾向がある。両群とも相談室と距離をおいている。リラックスの場群は悩みは他群より少ないものの、相談意志があり、また相談経験もあるものが多い。悩みがなくとも気軽に相談室を訪れる群であることが伺える。カウンセラーに親近感をもつ群は相談経験のあるものも多く、相談室認知度が高い傾向がある。相談室をリラックスの場と捉える群と近いようである。校内相談室への態度の回答無し群は相談意志も悩みもないとする割合が多く、相談室認知度が低い傾向がある。校内相談室に肯定的イメージ(依存・信頼群と親近感群)をもつものも両価的感情をもつものも、相談室認知度が高く、相談意志をもつ割合が高い。しかし肯定的イメージ群は悩みが無い傾向、相談経験のある傾向があり、逆に両価的感情群は悩みがある傾向が強いにもかかわらず、相談経験は他群と比較して多いわけではない。依存・信頼を要望する群は相談意志も悩みもある傾向が強く、相談室認知度も高い傾向がある。よって、相談室イメージが肯定的な群は悩みがあっても無くとも気軽に来談できる傾向があり、回答無し群は悩みや相談とは距離をおいた位置にある傾向、両価的感情群は悩みがあり相談したいにもかかわらずなかなか相談室を訪れるまでには至らないことが示唆される。

### 5) イメージ群の特徴

〈依存・信頼〉女子、中学生の割合が高く「校内相談室への態度」「要望」でストレスが高い傾向がある。特に依存・信頼を要望する群は悩み、相談意志がある傾向が

強く、相談室認知度も高い。来談予備軍と考える。  
 <親近感>女子・中学生の割合が高く、悩みは無くストレス症状が少ない傾向がある。相談室認知度がもっとも高く相談経験のある割合が高い。安定した対人関係から相談室やカウンセラーに気軽にかかわることができる群であろう。親しみやすさを要望する群はストレス症状を多くもつ傾向がある。<受容への期待>ストレス症状が低い傾向がある。相談室に肯定的イメージをもつ群の中では相談室に受身的・消極的なかかわりであることが伺える。<肯定的評価>依存要求が低い傾向、ストレス症状が少ない傾向にある。高校生の割合がいくぶん多い。対人的に安定した、健康な群と捉えてよいかと考えられる。<両価的感情>相談室イメージの両価的感情群と校内相談室への態度の両価的感情群は異なる特徴をみせた。相談室イメージの両価的感情群は女子が多く相談経験のない割合が高い。ストレス症状は他群より多い。一方、校内相談室への態度の両価的感情群は性別に差は無く依存要求が強い。ストレス症状も他群より多い。悩みも相談意志もあり、相談室認知度が高い。校内相談室へ近付きたいけど近付けないイメージは、実際に相談室に相談しようとする心の準備はしているが、行きづらいという状態にあることが伺える。<違和感>依存要求、ストレス症状ともに平均的で男女学年とも比率の偏りはみられない。<非関与の態度>依存要求が低くストレス症状が多い傾向がある。相談室認知度が他群より少ない。本研究では依存要求とストレスの多さが正の相関関係にあったことから考えると注目すべき一群であると思われる。<イメージ無し>依存性は低い傾向があるがストレス症状の多さは他群と差はない。男子が多く、相談室認知度は少ない傾向がある。<回答無し>男子が多く相談意志がない傾向が強い。相談室認知度が低い。依存性も低くストレス

症状も他群より少ない。相談室とのかかわりが薄い一群と思われる。<リラックスの場>相談室を息抜きの場とイメージする一群を本研究では別カテゴリーとして設けたが、この群は相談意志、相談経験のある傾向が強くまた相談室認知度も高い。相談室を活用しやすい一群と考えられる。<要望>相談室に要望がある群とない群では依存要求、ストレス症状、相談意志の有無、悩みの有無、相談室認知のすべてに差が出ている。相談室に積極的に要望するものは、悩みを抱えやすく、そのために相談室を利用しようとする可能性があるだろう。

#### 6) 総合考察と展望

以上より、①中高生の相談室イメージは依存要求、精神的健康、悩みの有無、相談希望の有無、相談室認知と関連の中で来談の準備因子として捉え得る可能性があること②青年期前中期の発達による依存対象の変化が相談室イメージに関連している可能性があることが示唆された。

今回の研究では要因の特定化が難しいため学校差については詳しく検討しなかったが、各学校の相談室そのものがイメージに影響している可能性は高い。例えば、相談室の位置が生徒のなかなか目の届きにくいところにある場合には距離感のあるイメージが多いようだ。本研究で悩みをもって校内相談室をよく認知しているが近付きがたいとした両価的感情群の生徒が相談室の物理的な条件で来談を抑制されているなら、その条件を解明し、相談室のあり方を変えていくことが必要と考える。例えば、相談室におもちゃを置く、心理テストを看板にするなどは、相談したいがしにくい生徒が来室する「まっとうな理由やきっかけ」となり、「相談室に行った子」として自分や他人から否定的レッテルをはられることから守るのではないだろうか。